SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

成人学習者による変化表現：「～なる」構造の習得に関する事例研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007689

成人学習者による変化表現
「～なる」構造の習得に関する事例研究

久　野　美津子

【要　旨】

英語を母語とする中級の成人学習者の縦断的発話資料を基に「～なる」構造の使用状況を調査した。その結果、主に次の特徴が見られた。(a)「名（詞）＋になる」の使用が多かった、(b)「名＋になる」では「に」脱落と正用が混在し「で」「する」による代用の誤りも見られた、(c)「ナ形容詞＋になる」でも「に」脱落と正用が混在していた、(d)「どう＋なる」で「に」過剰使用が見られた、(e)「イ形容詞＋くなる」「動詞＋ようになる」「否定＋なる」は誤りがほとんどなかった。(b)～(d)の誤りを語彙別に調べたところ、「複雑」「駄目」「どう」を含む表現では正用出現後に再び誤りが観察され、定着が不安定で語彙識別が困難な様子がうかがえた。また「取り立て助詞」を伴う名詞の場合にも誤りが多かった。本調査で見られた「に」脱落と正用との混在や「に」過剰使用は、幼児を対象とした先行研究でも報告されており、同構造習得には類似した特徴があることが確認された。

【キーワード】第二言語習得、成人学習者、「～なる」構造、「に」の脱落、「に」の過剰使用

1．はじめに

本稿は第二言語（L2）として日本語を学んだ成人学習者の、変化表現「～なる」構造習得に関わる事例研究である。「～なる」構造は前接する品詞の違いによって「～になる」(例：暇になる)、「～くなる」(例：暑くなる）等、活用を変化させる必要がある。同構造習得に関して、これまでL2の成人学習者には「に」の脱落（「*φ」）や過剰使用、「に」を他の助詞で代用する誤り等が報告されている（鈴木1978、松田・斎藤1992）[1]。また、L2幼児を縦断的に調査した久野（2005）では、習得の最初期にまず「*φ」のみが観察される時期があり、その後「に」が使用され始めるものの「*φ」も混在する時期があったと述べている。このように、「～なる」構造の習得は幼児、成人ともに容易でないことが予想される。しかし、これまで同構造に焦点を当てた習得研究は少なく、成人を対象とした縦断的調査もほとんど行われていないと思われる。そこで本稿では、英語を母語（L1）とする成人学習者１名の縦断的発話資料を基に、「～なる」構造の使用状況を調査し、発話を記録するとともに、習得に関する特徴を記したいと考える。

2．L2先行研究

L2先行研究では、格助詞「に」の習得研究の中で「～なる」構造に触れているものもある（鈴木1978、松田・斎藤1992、久保田1994）。このうち鈴木（1978）では、学習者に見られる誤りとして「に」の脱落（例：*休みなる）や「に」の過剰使用（例：*暑くになりました）等が報告されている。また、松田・斎藤（1992）は初級レベルの韓国人成人2

名から得た6ヶ月間の発話データ（16回分）を分析している。そして、1名については第5回目および第9回目のデータで、もう1名については第14回目のデータで、「に」を「が」で代用する誤り（例：＊学者がなるほうがいい）があったことを報告している。ただし、これらの研究はいずれも「～なる」構造に焦点を当てたものではないため、体系的な習得過程を知ることは難しいと思われる。

一方、久野（2005）はブラジル人幼児2名（Y児、K児）の発話資料を基に、「～なる」構造の習得過程について調査している。観察期間は彼らが保育園に入園した直後から19ヶ月間であり、観察開始時の年齢はY児が4歳7ヶ月、K児が3歳6ヶ月である。両児に見られた主な結果は（1）のとおりである。

（1）久野（2005）の主な結果

a．「名（詞）＋になる」「ナ（形容詞）＋になる」構造では、最初期に「に」が使えない時期が観察された。

b．「名＋になる」「ナ＋になる」構造では「に」が継続的に使用されるようになっても、「*φ」が混在していた。

c．「名＋になる」「ナ＋になる」両構造は「に」の出現時期がほぼ同時であった。

d．正用「に」が多用されるようになると、「イ（形容詞）＋くなる」構造でも「に」が過剰使用されるようになった。

e．「動（詞）＋ようになる」構造の出現時期は遅かった。

（1a）～（1c）の結果から、「名＋になる」構造と「ナ＋になる」構造の習得過程は類似していると推測された。また、久野（2005）ではL1幼児1名（観察時の年齢：1歳9ヶ月～3歳1ヶ月）の「～なる」構造の発話状況も調査し、L2幼児の結果と比較している。そして、L1幼児には、最初期に「*φ」が見られ、「に」出現後も「*φ」が混在するという点や、「動＋ようになる」の出現が遅いという点で、L2幼児と類似した傾向が見られたと述べている。しかし、（1d）のような過剰使用はL1幼児には見られなかった。このことから、L2幼児の場合、形容詞の種類の識別や接続方法に関して習得が困難だったと考えられた。

久野（2006）は久野（2005）と同じデータを用いて、L2幼児2名の「否定＋なる」構造（例：見えなくなる）の使用状況を調査したものである。結果は「否定」を表す語彙（例：見えなく）と「なる」との接続方法に関する誤りはなく、「に」の過剰使用も観察されなかった。これはおそらく「否定」語彙の品詞が何であれ、ナイ形（例：見えない、痛くない）さえ分かれば「～なくなる」と表現できるため、活用に関してはそれほど困難ではなかったのだろうと推測された。ただし「*（教室に誰も）なくなっちゃった」「*（電話が）でしなくなっちゃった」等の「否定」語彙自体の誤りは観察されていた。そして、これらの「否定」語彙は全て、同構造で用いられる以前に既に通常の否定表現（例：いない）として発話されており、その際「*（人が）ない」等の誤りもしていた。このことから、通常の否定表現は「否定＋なる」構造習得の前段階となるものであり、通常の否定表現での誤りは「否定＋なる」構造でもそのまま誤りとして用いられる可能性があると考えられた。

これらの研究結果を踏まえ、本稿では成人学習者の「～なる」構造および「否定＋なる」

構造の使用状況を縦断的に記すとともに、「*φ」や過剰使用等の誤りを調査することによって、同構造の習得過程の一端を示したいと考える。

３．調査

３－１　調査方法

被験者は英語をL1とするアメリカ人1名である（20代男性、S）。母国で大学2年生の時（2007年）に初めて日本語を勉強し始めた。翌3年生の時、日本の関西地区の大学に9ヶ月間留学した。その後、母国に戻り、大学を卒業した。そして、2010年8月に再び来日した。来日後は静岡県西部地区に滞在し、2011年10月から約半年間、静岡大学で中級レベルの日本語クラスに参加した。調査期間は2011年10月～2012年3月の6ヶ月間（便宜上、第Ⅰ期とする）、および2012年10月～2013年3月の6ヶ月間（第Ⅱ期とする）である。調査を開始した時期は、Sが再び来日してから1年2ヶ月後のことである。調査は原則として1ヶ月に1度、Sと筆者が約1時間の自由会話をし、録音したものを後に文字化した。調査回数は第Ⅰ期が6回、第Ⅱ期が5回で、計11回である。調査項目は（2）に示す6つの構造である[(2)]。以下、本稿では「否定＋なる」構造も「～なる」構造に含めることとする[(3)]。

（2）　a.「名＋になる」(例：医者になる)　　b.「ナ＋になる」(例：元気になる)
　　c.「動＋ようになる」(例：話せるようになる)　d.「イ＋くなる」(例：眠くなる)
　　e.「どう＋なる」(例：どうなる)　　f.「否定＋なる」(例：食べなくなる)

「～になる」は会話でしばしば「～んなる」とも発音され（鈴木1978）、Sの暮らしている地域でも多く使用されるため、正用として調査対象に含めた。便宜上、データは1ヶ月ごとに記す。

３－２　調査結果

３－２－１　結果の概要

「～なる」構造の使用状況は、表1（第Ⅰ期）、表2（第Ⅱ期）のとおりである。第Ⅰ期、第Ⅱ期ともに、「名＋になる」の使用回数が最も多く、全体の半数以上を占めていた。これに対し、他の構造は比較的使用回数が少なかった。各構造の使用割合（正用と誤用を含む）を示したものがグラフ1である。

グラフ１　第Ⅰ期と第Ⅱ期の構造別使用割合

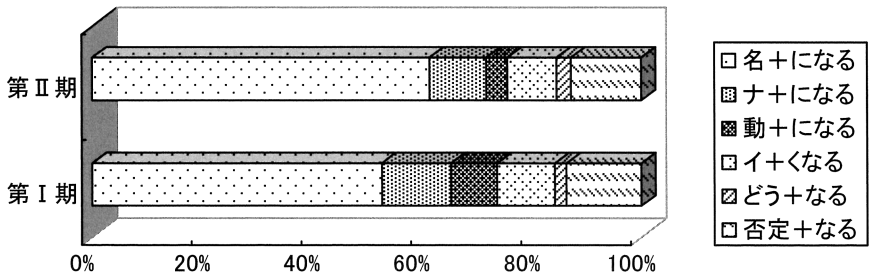


表１　第Ⅰ期の使用状況

構造＼観察時期		’11 10月	11月	12月	’12 1月	2月	3月	構造別計
名＋になる	正用	6	6	10	8	8	8	46
	*φ	1	—	1	1	—	—	3
	*する	—	—	1	—	—	—	1
ナ＋になる	正用	—	2	3	3	2	2	12
動＋ようになる	正用	1	2	—	2	2	1	8
イ＋くなる	正用	2	2	1	—	5	—	10
どう＋なる	正用	—	—	—	1	—	—	1
	*に	1	—	—	—	—	—	1
否定＋なる	正用	1	6	2	3	—	—	12
	*する	—	1	—	—	—	—	1
各月計	正用	10	18	16	17	17	11	95（正89）（誤6）
	*φ	1	—	1	1	—	—	
	*に	1	—	—	—	—	—	
	*する	—	1	1	—	—	—	

表２　第Ⅱ期の使用状況

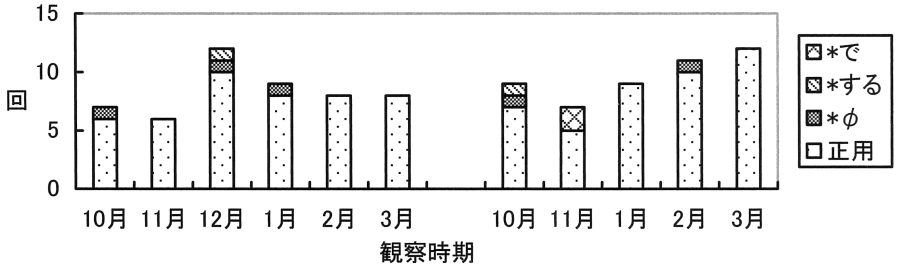
構造＼観察時期		’12 10月	11月	’13 1月	2月	3月	構造別計
名＋になる	正用	7	5	9	10	12	43
	*φ	1	—	—	1	—	2
	*する	1	—	—	—	—	1
	*で	—	2	—	—	—	2
ナ＋になる	正用	1	2	—	—	3	6
	*φ	1	—	1	—	—	2
動＋ようになる	正用	—	1	2	—	—	3
イ＋くなる	正用	2	3	—	2	—	7
どう＋なる	正用	1	—	—	—	—	1
	*に	—	—	—	—	1	1
否定＋なる	正用	—	3	2	1	4	10
各月計	正用	11	14	13	13	19	78（正70）（誤8）
	*φ	2	—	1	1	—	
	*に	—	—	—	—	1	
	*する	1	—	—	—	—	
	*で	—	2	—	—	—	

誤りは、「名＋になる」「どう＋なる」「ナ＋になる」「否定＋なる」で観察された。誤りの種類は「*φ」(例：*複雑なる、*教えることなった)、「に」の過剰使用（例：*どうになる)、「で」による代用（例：*映画でもなった）などがあった。このほか、本来「なる」の使用が自然であると思われる箇所で「する」を用いたもの（例：*気分が逆にしちゃって）も観察された。

３－２－２　各構造の使用状況の推移と発話例

以下では構造別に第Ⅰ期と第Ⅱ期の使用状況の推移をグラフに示し、発話例をいくつか記していく。グラフ２は「名＋になる」の結果である。同構造の誤りには「*φ」「*する」「*で」があり、このうち「*φ」は第Ⅰ期、第Ⅱ期ともに断続的に見られた。(３）は発話例である。発話例最初の〈　〉には話題を記した。例中の（　）は筆者が補った語、(→)は本来言うべき表現、例文最後の（　）内の数字は発話時期である。発話例が長く一部省略した箇所は「～」と記した。本稿で調査対象とした箇所には網掛けをした。

グラフ２　「名＋になる」の使用状況



(3)「名＋になる」の発話例

a．〈『クリスマスキャロル』のお爺さんの話〉そうすると、気分が *逆にしちゃって（→逆になっちゃって）とてもいい人になる。(Ⅰ期12月)

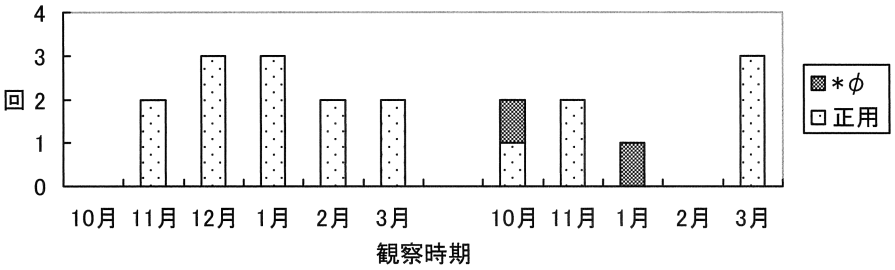
b．〈集団面接の話〉～ それは 一人だけの 性格じゃなくて多分 その人は まあ 集団になったら 誰がリーダーになるとか という人間関係が うまくできるかな、でも～。(Ⅰ期2月)

c．まあ 僕の部屋はもう 辞書と電子辞書と コンピューターとプリンターと 本、バーっと *ばらばらにされてる（→ばらばらになっている)。(Ⅱ期10月)

d．まあ僕も多分老眼になるかもしれないよ。(Ⅱ期2月)

グラフ３は「ナ＋になる」の結果である。第Ⅰ期に誤りは見られなかったが、第Ⅱ期に「*φ」が観察された。(４）は発話例である。

グラフ３　「ナ＋になる」の使用状況



（4）「ナ＋になる」の発話例

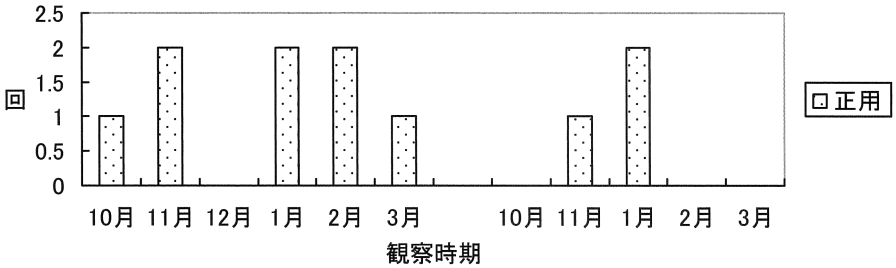
a．日本人は まあ 海外で有名になってから、日本であの もっともっと ますます あの有名になる。（Ⅰ期12月）

b．〈面接の話〉服とか それも 必要になるし、それから まあ 面接来てる人は 緊張するか 緊張しないか、丁寧に話せる とか 身振りも まあ 見学される。（Ⅰ期2月）

c．そうすると 僕の日本語は上手にならないから、発音的には とか。（Ⅱ期11月）

グラフ４は「動＋ようになる」の結果である。同構造の使用はいずれも断続的であったが、第Ⅰ期、第Ⅱ期を通じて誤りは一度も見られなかった。（5）は発話例である。

グラフ４　「動＋ようになる」の使用状況



（5）「動＋ようになる」の発話例

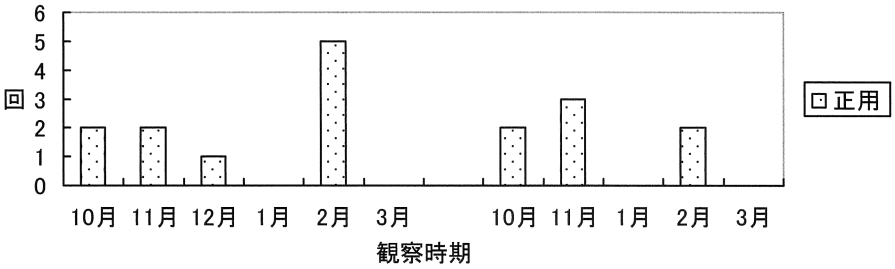
a．その時から ほんとに その 玉砕という言葉は あの どんどん 政府に 使われ（る）ようになった。（Ⅰ期10月）

b．まあ 普通に あの読めるようになりたい と思っているけど、その〜。（Ⅰ期2月）

c．もしも まあ博士（課程）なら 目指しているなら 普通の日本人よりは まあ 読めるようにならなくちゃいけないし。（Ⅱ期1月）

グラフ５は「イ＋くなる」の結果である。同構造も「動＋ようになる」と同様、使用は断続的であったが、誤りは見られなかった。（6）は発話例である。

グラフ５　「イ＋くなる」の使用状況



（6）「イ＋くなる」の発話例

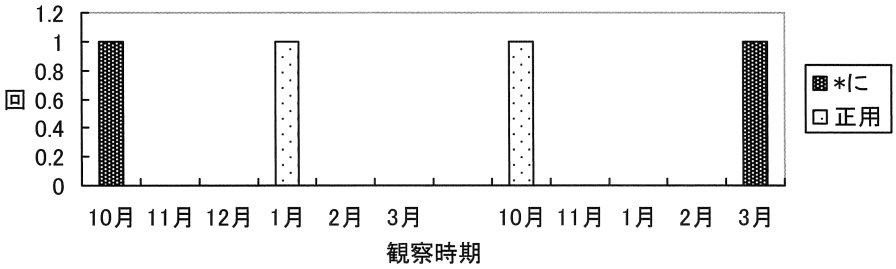
a．そしてまあ 家賃も だいぶ安くなってきた、そのおかげで。（Ⅰ期10月）

b．うーん、面白くなりそう。（Ⅰ期2月）

c．そういう点で 国として強くなればなるほど 民族が 弱くなると思う。（Ⅱ期11月）

グラフ6は「どう＋なる」の結果である。同構造は第Ⅰ期、第Ⅱ期に2回ずつ、計4回観察されたのみであった。そして、そのうちの2回に過剰使用「*に」が見られた。（7）は発話例である。

グラフ６　「どう＋なる」の使用状況



（7）「どう＋なる」の発話例

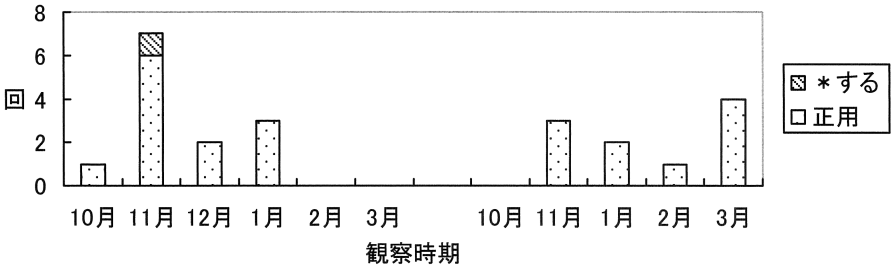
a．まあ その主人公は仕事をやめて、自分の人生は*どうになっている（→どうなっている）かちょっとわからなくて、まあ 迷ってるね。（Ⅰ期10月）

b．〈日本語教師の職〉無理無理 まあそうなりたくもないし、力があっても。（Ⅰ期1月）

c．〈村上春樹の新刊〉でも *どうになる（→どうなる）かな。（Ⅱ期3月）

グラフ7は「否定＋なる」の結果である。第Ⅰ期に「*する」を用いた発話が一度観察されたが、その他に誤りは見られなかった。（8）は発話例である。

グラフ７　「否定＋なる」の使用状況



（8）「否定＋なる」発話例

a．〈消せるボールペンの先端の丸い部分について説明〉だからこれは 全然 *なくせない（→なくならない）。（Ⅰ期11月）

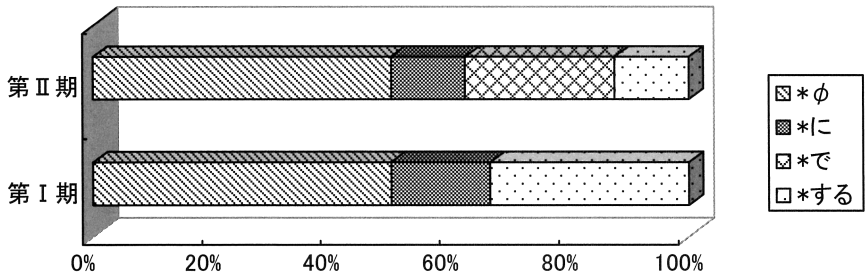
b．〈聴解の授業でメモを取らない理由〉それでもあの 集中力がなくなっちゃう。僕は その単語だけを書こうとすると、あの 聞けなくなっちゃう。（Ⅰ期11月）

c．〈祭りの仮面の話題〉それは あの 色んな あの 仮面を かぶったり、それあの 朝になると仮面がだんだん 人間らしくなくなる。（Ⅱ期1月）

３－３　誤りの特徴

誤りの回数は第Ⅰ期が95回中6回（6%）、第Ⅱ期が78回中8回（10%）であった。誤りには「*φ」「*に」「*で」「*する」の4種類があった。グラフ8は第Ⅰ期、第Ⅱ期それぞれの誤りの内訳を割合で示したものである。

グラフ８　第Ⅰ期と第Ⅱ期の誤りの内訳



4種類の誤りのうち3種類（「*φ」「*に」「*で」）はいずれも格助詞「に」に関わるものであり、特に「*φ」の割合は第Ⅰ期、第Ⅱ期共に高かった。以下ではこれら3種類について発話例を詳しく見ていく。

誤りの発話例を見ると、11種類の語彙（例：*複雑なる、*どうになる）が用いられていた。それらは「～こと」「ステレオタイプ」「サラリーマン」「トトン（とか）」「千円（しか）」「映画（も）」「言い訳（も）」「駄目」「複雑」「どう」「そう」である。ただし、これらの語彙は誤りとしてだけでなく、正用として観察される場合もあった。そこで、これら11種類の語彙を含む発話について、正用を含めた使用状況を調べてみた。結果は表3のとおりであ

る。表中の「○」は正用（回数は1回）を表す。

表３　誤用として用いられた語彙に関する使用状況

時期 / 語彙	Ⅰ期						Ⅱ期				
	10	11	12	1	2	3	10	11	1	2	3
～こと	*φ	○	○	○							○
ステレオタイプ			*φ								
サラリーマン				*φ○							
トトン（とか）							*φ				
千円（しか）										*φ	
映画（も）								*で			
言い訳（も）								*で			
駄目		○		○			*φ				
複雑					○	○			*φ		○
どう	*に						○				*に
そう				○							

この表から、誤りに関して主に3つの特徴がうかがえた。まず1つ目は、語彙が名詞の場合、「*φ」が観察された時期は正用よりも先かあるいは正用と同時であったという点である。(9）は「こと」を用いた発話例である。(9a）では「に」が脱落していたが、翌月の（9b）では「に」が正しく用いられていた。また（10）は「サラリーマン」を用いた会話例であるが、脱落と正用とが同時に観察されていた。この場合、観察者が聞き返したことによって、Sが文法を意識し、「に」を発話した可能性も考えられる。

(9)「こと」を用いた発話例

a．その時はフルタイムで まあ朝から夜まで 授業があったら まあその工場やその会社に行って まあ*教えることに（に）なっ（て）たけど、今あの 授業自体は あの 契約になる。(Ⅰ期10月)

b．保証人として資格がない ということになっちゃう。(Ⅰ期11月)

(10)「サラリーマン」を用いた発話例

S：〈就職の話題〉*サラリーマン（に）なりたくないなー。

観察者：ん？

S：サラリーマンに なりたくない。(Ⅰ期1月)

2つ目の特徴は、「とか」「しか」「も」などの取り立て助詞が名詞に付加された場合に、誤りが生じていたという点である[(4)]。取り立て助詞自体の発話は、観察を開始した第Ⅰ期10月に既に観察されていた（例：外国人しかいなかった。見つけた記事とか。日本人でも中

国人でもない。一瞬だけ起きて。)。しかし、取り立て助詞が「～なる」構造で用いられるようになったのは第Ⅱ期になってからであった。さらに、取り立て助詞を含む表現が同構造で正しく観察されることは一度もなかった。取り立て助詞と格助詞との関わりは複雑であると言われており、Sの場合も、何らかの理由により、取り立て助詞を用いた場合には「に」の脱落や他の助詞による代用という誤りが生じたと思われる[5]。

以下、(11) は「とか」「しか」を用いた発話例、(12) は「も」を用いた発話例である。このうち、(12a) (12b) ではいずれも「*でも」という表現が用いられているが、「*で」による代用が観察されたのはこの時だけであった。さらに、同じ観察日に正しい用法の「でも」が数回観察されていた（例：25円でもおかしくない。黄色でも赤でも まあ綺麗か分からないけど。どんな格好でも このおじさんぽいの顔でも 問題ない。)。このことから、Sはこの時期に「でも」を1つの固まり表現のように覚え、使用していた可能性もあるのではないかと考えられる。

(11)「とか」「しか」を用いた発話例

a．まあ 普通の心臓（のリズム）は トトン トトン（だけど)、僕のリズムが *トートトン とか（に）なって、それから まあ血圧も*駄目（に）なって、～。(Ⅱ期10月)

b．〈翻訳の仕事〉3時間でも、まあ1時間*千円（に）しかならない。(Ⅱ期2月)

(12)「も」を用いた発話例

a．〈谷崎潤一郎の小説〉*映画でもなった（→映画にもなった）けど。(Ⅱ期11月)

b．それは*言い訳でもならない（→言い訳にもならない）よ。(Ⅱ期11月)

3つ目の特徴は、語彙が「駄目」「複雑」「どう」の場合、正用が一旦観察されても、その数ヶ月後に誤りが観察されていたという点である。名詞の場合はそのような傾向がなかった。このことから、おそらくSにとってナ形容詞や「どう」などの語彙の識別は、名詞よりも困難であったことが予想される。(13) (14) はそれぞれ「駄目」「複雑」を用いた発話例である。

(13)「駄目」を用いた発話例

a．〈自分の保証人について〉でもまあ 両親があの協力しても 貯金全然ないから、それも駄目になっちゃうかもしれない。(Ⅰ期11月)

b．〈政治〉田中角栄はやったけど、でも結局それも駄目になっちゃった。(Ⅰ期1月)

c．〈心臓の鼓動〉それから まあ 血圧も*駄目（に）なって、まあ つまり 若さがあっても リズムは出来るわけがない。(Ⅱ期10月)

(14)「複雑」を用いた発話例

a．それに複雑になるよ。(Ⅰ期2月)

b．それにもう まあ僕の彼女の 両親の ずっと昔からの 友達は 大阪に住んでいて、その人は 他の友達がいて、まあ *複雑（に）なる。(Ⅱ期1月)

c．〈村上春樹の小説〉～その男性は ちょっと あ 誰かに 追いかけ られてるなあ と思って、その後は 話が 複雑になる。（Ⅱ期3月）

３－４　先行研究との比較

Ｓの結果を先行研究と比較したい。まず、成人を対象とした研究と比べる。Ｓに見られた誤りのうち、「*φ」は鈴木（1978）でも報告されており、共通していた。また「*に」の過剰使用も、Ｓの場合は「どう＋なる」で、鈴木（1978）の場合は「イ＋くなる」でそれぞれ観察されていた。一方、代用の誤りに関しては先行研究との共通点が見られなかった。Ｓに観察された「*で」「*する」を用いた誤りは、鈴木（1978）および松田・斎藤（1992）では報告されていなかった。そして、松田・斎藤（1992）で報告のあった「*が」はＳには見られなかった。

次に、幼児を対象とした研究と比べる。表４は久野（2005、2006）のL2幼児の結果と本調査Ｓの結果について、主な特徴を比較したものである。各構造で共通している特徴には網掛けをした。

表４　久野（2005、2006）のL2幼児と本調査Ｓとの比較

構造＼被験者	久野（2005、2006）のL2幼児	本調査Ｓ
名＋になる	• 最初期に「*φ」のみの段階あり • 「*φ」と「に」との混在 • 「*に」過剰使用	• 「*φ」と「に」との混在 • 「*で」による代用 • 「*する」による代用
ナ＋になる	• 最初期に「*φ」のみの段階あり • 「*φ」と「に」との混在	• 「*φ」と「に」との混在
動＋ようになる	• 出現時期が遅い	• 正用のみ
イ＋くなる	• 「*に」の過剰使用	• 正用のみ
どう＋なる	• 「*に」の過剰使用	• 「*に」の過剰使用
否定＋なる	• 「否定」語彙の誤選択や活用誤り	• 「*する」による代用

まず、相違点は、L2幼児の場合、「名＋になる」「ナ＋になる」の最初期に「*φ」のみの段階が観察されたが、Ｓの場合、観察されなかったという点である。習得過程の最初期に「*φ」のみが観察されたり「*φ」の割合が高かったりするという傾向は、これまで様々な格助詞研究でも報告されている（久野2003、2012、2013、白畑・久野2005、2008）。そして、これらの場合、被験者は全て久野（2005、2006）のL2幼児と同様、母国での日本語学習経験がなく、さらに来日（幼児は保育園入園）直後から観察を開始していた[(6)]。これに対し、Ｓの場合、母国での学習経験もあり、日本での滞在経験もあった（留学期間を合わせ計1年11ヶ月間）。このことから、Ｓに「*φ」のみの段階、あるいは「*φ」の割合が高い段階が見られなかったのは、「～なる」構造の習得過程における最初期を既に過ぎていたためだろうと考えられる。

一方、共通点は「名＋になる」「ナ＋になる」両構造において「*φ」と「に」とが混在していたという点である。格助詞の習得において、正用出現後も「*φ」が消えず長期に

わたって観察されるという傾向は、先に挙げた久野（2003、2012、2013）や白畑・久野（2005）でも報告されている。「～なる」構造の習得過程は、語彙の品詞を識別し、必要に応じて格助詞「に」を付加する規則を習得していく過程であるとも言え、その点で、様々な格助詞の習得過程と類似しているとも考えられる。

4．おわりに

本稿では、日本語学習経験および日本滞在経験のある成人学習者１名の縦断的発話データを基に、「～なる」構造の使用状況を調査した。その結果、主に次のような特徴が見られた。

（15）

a．第Ⅰ期、第Ⅱ期を通じて「名＋になる」の使用が多く、全体の半数以上を占めていた。

b．「名＋になる」では「*φ」「*で」「*する」が観察された。「*φ」は第Ⅰ期、第Ⅱ期を通じて断続的に見られ、「に」と混在していた。また、第Ⅱ期には取り立て助詞を伴った場合に誤りが多く見られた。

c．「ナ＋になる」では第Ⅱ期に「*φ」が観察された。「*φ」は「に」と混在していた。

d．「どう＋なる」では「*に」の過剰使用が観察された。

e．「イ＋くなる」「動＋ようになる」では誤りが観察されなかった。「否定＋なる」では「*する」が1例見られたが、他に誤りはなかった。

これらの特徴のうち、（15b）（15c）（15d）の誤りはいずれも「に」に関わるものであることから、「～なる」構造習得には「に」の習得が深く関わっていると考えられる。同構造を習得するには、学習者は語彙の品詞を識別しなければならない。さらに、品詞が名詞、ナ形容詞、動詞の場合には「に」を付加し、それ以外の品詞には「に」を付加しないという規則を習得しなければならない。Sの場合、文法を明示的に学習していたことから、「に」の付加に関わる規則は理解していただろうと思われる。しかし、語彙については、その品詞を1つずつ具体的に覚えていく必要があり、語彙数も膨大であるため、習得は容易でなかったと予想される。特に「駄目」「複雑」「どう」などの語彙の場合、正用表現が確認されてから数ヵ月後に誤りが観察されており、定着が不安定な様子がうかがえた。

一方、（15e）に記したように、「イ＋くなる」「否定＋なる」「動＋ようになる」では誤りがほとんど見られなかった。その理由の1つとして、これらの構造で用いる語彙の識別が、Sにとって比較的容易であったという点が考えられる。イ形容詞および否定形の語彙はいずれも「暑い」「暑くない」のように「–i」という音形を伴い、動詞（辞書形）の語彙は常に「読む」「する」のように「–u」という音形を伴う。このような音形が語彙識別の際のヒントの1つになっている可能性はあると思われる。また「動＋ようになる」は「に」を必要とする構造であるが、一度も「*φ」が観察されなかった。これは、おそらく「ようになる」を1つの固まり表現のように覚え、用いていた可能性もあるのではないかと考えられる。

これまで、成人学習者の「～なる」構造の使用状況を縦断的に調査した研究はほとんどない。そのため、本調査で得られた結果は、今後のL2学習者の同構造の習得過程を解明する上で、何らかの示唆を与えるものと思われる。本調査で見られた「名＋になる」「ナ＋になる」での「*φ」と「に」との混在や、「どう＋なる」での「*に」の過剰使用は、久野（2005）のブラジル人幼児にも見られた特徴である。L2習得では、学習者のL1の相違に関わらず類似した習得過程を辿る文法構造が多いとも言われている（Lightbown & Spada 1999）。このことから「～なる」構造習得に関しても、基本的には類似した習得過程があるという可能性が考えられる。これに対し、取り立て助詞を伴う場合の誤りや「*する」を用いた誤りは先行研究では報告がなく、Sに特徴的なものであった。これらの誤りについては、「～なる」構造以外で用いられている取り立て助詞の使用状況や、「～する」構造（例：静かにする）の使用状況などを調査し、「～なる」構造との関わりを検証する必要があると思われる。これらの課題も含め、今後、より多くの事例を調査し、「～なる」構造の習得過程についてさらに解明していく必要があると思われる。

謝辞

本データ収集にあたり、袴田麻里先生をはじめとする国際交流センターの先生方に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

注

(1) 当該文脈での不適格な表現には「*」を付した。

(2) 変化を表す動詞は寺村（1982）の「なる」類に従って判断したが、観察された動詞は「なる」のみであった。「どう＋なる」構造とは「～になる」「～くなる」に変化しない場合である。擬態語や擬音語を用いた表現は「名＋になる」に含めた。また「～が気になる」のような表現は慣用表現と判断し、調査対象としなかった。

(3) 動詞の否定表現には「～ないようになる」という表現方法もあるが（友松・他2000）、本調査ではそのような発話は観察されなかった。

(4)「取り立て助詞」という分類は寺村（1991）や庵・他（2000）を参考にした。

(5) 寺村（1991、p.22）は「取り立て助詞としてここに一括しているものの中にもその構文的性質に異なりがあり、また格助詞として通常一括されているものの中にもやはり構文的性質に異なりがあること、取り立て助詞と格助詞との相互承接のきまりには、それらが複雑に絡み合っていることが分かった」と、取り立て助詞と格助詞との関わりの複雑さを述べている。

(6) 久野（2003）は幼児2名（L1はポルトガル語）の「に」「で」、久野（2012）は成人1名（L1はヒンディー語）の「の」、久野（2013）は成人2名（L1はヒンディー語）の「に」「で」、白畑・久野（2005）は児童3名（L1は中国語または英語）の「の」、白畑・久野（2008）は児童1名（L1は中国語）の格助詞全てについて、それぞれ報告したものである。

参考文献

久野美津子（2003）「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号　83-92

――――――（2005）「ブラジル人幼児２名による変化を表す「～なる」構造での誤りと習得過程」『日本語教育』第127号　pp.31-40

――――――（2006）「ブラジル人幼児の事例による否定を伴う変化表現の習得の特徴」『静岡大学留学生センター紀要』第５号　pp.29-40

――――――（2012）「ヒンディー語母語話者による日本語名詞句構造に関わる「の」の習得過程―被験者Ｍの来日後５ヶ月間の事例―」『静岡大学国際交流センター紀要』第６号　pp.21-38

――――――（2013）「ヒンディー語母語話者２名による場所表現「に」「で」の習得過程に関する事例研究」『静岡大学国際交流センター紀要』第７号　pp.1-20

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』松岡弘監修、スリーエーネットワーク

久保田美子（1994）「第２言語としての日本語の縦断的習得研究―格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について―」『日本語教育』82号　pp.72-85

Lightbown, P, M. & Spada, N.（1999）　*How languages are Learned, Revised Edition.* Oxford: Oxford University Press.

松田由美子・斎藤俊一（1992）「第２言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第２号　pp.129-156.

白畑知彦・久野美津子（2005）「L2児童による日本語名詞句構造内での「ノ」の習得」*Second Language Vol.4*、日本第二言語習得学会（J-SLA）pp.29-50

――――・――――（2008）「中国人児童による日本語格助詞の発達過程の記述―来日後４ヶ月間の記録―」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第58号　pp.143-158

鈴木忍（1978）『教師用日本語教育ハンドブック③文法Ｉ助詞の諸問題１』国際交流基金凡人社

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2000）『どんなときどう使う日本語表現文型200』アルク

The Case Study of Process of the Japanese [～*naru*] Structure by an Adult Learner

HISANO, Mitsuko

This paper is a case study of the acquisition process of [～*naru*] structure by an L2 learner. The subject was an adult English speaker, who has experienced both learning Japanese and staying in Japan. Samples of spontaneous Japanese speech were collected longitudinally.

The main results are as follows: (a) The subject used more [noun + *naru*] structure than other structures. (b) In [noun + *ninaru*] structure, the error of omitting *ni* was sometimes observed although the subject had already produced *ni* correctly. A few misuses of *de* (in place of *ni*) and *suru* (in place of *naru*) were also observed. (c) In [*na*-adjective + *ninaru*] structure as well, the omitting of *ni* was sometimes observed. (d) In [*dou* + *naru*] structure, the overuse of *ni* was observed. (e) There were little or no mistakes in [i-adjective + *kunaru*], [verb + *youninaru*] and [negative phrase + *naru*] structures.

As for the results (c) (d), with words such as *fukuzatsu* (=complex), *dame* (=useless) and *dou* (=how), the subject had mistakes (omitting or overusing *ni*) even after he had produced correct phrases. This may mean that he had some difficulty in recognizing the part of speech of these words. Furthermore, as for the results of (b), the mistakes were seen especially when the noun was used with focus particles such as *mo* (=also), *shika* (=omly) and *toka* (=and so on).

The phenomenon of the omission of *ni* even after the correct expressions appeared in [noun + *ninaru*] and [*na*-adjective + *ninaru*] structures (referred to in (b)(c)), and the overuse of *ni* in [*dou* + *naru*] structure (referred to in (d)) are similar to those of previous research based on data from L2 children. Judging from these results, there seem to be basic similar features in the acquiring process for L2 learners.